

残留応力の影響を考慮したばかりの弾塑性安定問題解析

宮崎大学工房部 正員 太田俊昭

" " 学生員 関田義美

I まえがき 先に著者らは、軸力と曲げモーメントを受ける静定ばかりを対象としてその安定性を検討した結果、部材固有の残留応力を無視して設計することは、極めて危険であることを確認した。従って本論では、同理論を不静定ばかりに応用してより弾塑性安定問題を論じようとして、残留応力の及ぼす耐力の低減効果について定量的に把握せんと試みたものである。

II 安定問題の基礎式とその応用

任意の軸力と曲げモーメントの組み合せ負荷を受ける図-1 の直線部材 A B を n 等分割すれば、一般に分割更いのモーメントは、図-1 の記号を用いて

$$M_i = M_{AB} + Q_{AB}X_i + H_{AB}Y_i + M_i^* \quad \cdots \cdots \cdots (1)$$

$$\text{ここで}, Q_{AB} = -(M_{AB} + M_{BA} + H_{AB}R/l) / l \quad \cdots \cdots \cdots (2)$$

式(1) & 式(2)を代入して、降伏曲げモーメント M_y で無次元化すれば

$$\bar{M}_i = (1 - \bar{X}_i) \bar{M}_{BA} + (-\bar{X}_i) \bar{M}_{AB} + \bar{Y}_i (\bar{X}_i) \bar{H}_{AB} + \bar{Y}_i^2 \bar{F}_{AB} + \bar{M}_i^* \quad \cdots \cdots \cdots (3)$$

$$\text{ただし } \bar{V}, \bar{M}_i = M_i/M_y, \bar{X}_i = X_i/l, \bar{M}_{AB} = M_{AB}/M_y, \bar{M}_{BA} = M_{BA}/M_y, \bar{Y}_i = Y_i/l, \bar{Y}_i^2 = M_y^2/M_y, \bar{F}_{AB} = H_{AB}/M_y$$

M_y : 中間荷重によるモーメント, M_y : 降伏軸力。

式(3)を行列表示すれば、一般に次の式で与えられる。

$$[\bar{M}] = (1 - [\bar{X}]) \bar{M}_{BA} + [-\bar{X}] \bar{M}_{AB} + [\bar{Y}] \bar{H}_{AB} [-\bar{X}] + [\bar{Y}]^2 \bar{F}_{AB} [\bar{Y}] + [\bar{M}^*] \quad \cdots \cdots \cdots (4)$$

部材 A B に与えられる補正エネルギー \bar{U}^* は、次のようく表められる。

$$\bar{U}^* = \int \int \phi dM dS \quad \cdots \cdots \cdots (5)$$

A B 部材の回転角 θ_A, θ_B は、式(5)に変分原理を適用して

$$\theta_A - R = \frac{\partial \bar{U}^*}{\partial M_{AB}} = w \int_A^B \phi (1 - X) dX$$

$$\theta_B - R = \frac{\partial \bar{U}^*}{\partial M_{BA}} = w \int_B^A \phi (-X) dX \quad \text{ここで } R, w = A/l, \phi = \phi/\phi_y, \phi_y: \text{降伏曲率}.$$

上式を行列表示すれば

$$\left. \begin{aligned} \theta_A - R &= w [a] (\phi) \\ \theta_B - R &= w [b] (\phi) \end{aligned} \right\} \quad \cdots \cdots \cdots (6)$$

ここで, $[a], [b]$ は, n 次の raw matrix。

次に、重直変位 Y_i は、中一法公式によつて次式で与えられる。

$$Y_i = X_i \theta_A - \int_0^{X_i} \phi (X_i - X) dX + Y_0 \quad \cdots \cdots \cdots (7)$$

式(7)を変形して

$$[Y] = [X] \theta_A - w [d] (\phi) + [P_0] \quad ([d] \text{ は, } n \text{ 次の正方行列}) \quad \cdots \cdots \cdots (8)$$

以上、説明した式(4)～式(8)を、図-2 に示めす 2 スパン連続梁 ($P = KH_0/l$ の等分布荷重と軸力 H_0 を同時に受ける) に応用すれば、以下のとおりである。

まず、部材を 8 等分し、かつ断面(矩形)を 6 等分しあうえで、図-2 の記号を採用すれば、対称条件及び境界条件により

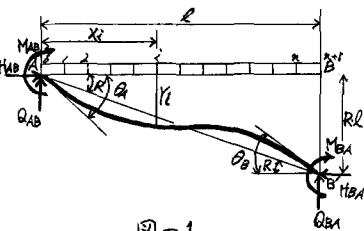


図-1

$$M_{ba} = \theta_a = R = 0$$

よって式(4)は

$$[\bar{M}] = -[\bar{X}] \bar{M}_{ba} + [\bar{P}] \cdot \bar{H}_0^* + K[\bar{M}] \quad (9)$$

ただし、 $\bar{H}_0^* = R \bar{H}_0$, $\bar{M}^0 = \bar{H}_0^* (\bar{X} - \bar{X}^2)/2$ 。

一方、式(6)は

$$\theta_a = w(a)[\bar{\theta}] = [42 36 30 24 18 12 6 1] (\omega \lambda^3/6)[\bar{\theta}] \quad (10)$$

$$\theta_b = w(b)[\bar{\theta}] = [6 12 18 24 30 36 42 13] (\omega \lambda^3/6)[\bar{\theta}] = 0 \quad R, R^*, \lambda = 1/8 \quad (11)$$

また、式(8)は

$$[\bar{P}] = [\bar{X}] \bar{G}_a - w(a)[\bar{\theta}] \quad (12)$$

$$\text{ここに, } [\bar{X}] = \begin{bmatrix} 1/8 \\ 2/8 \\ 3/8 \\ 4/8 \\ 5/8 \\ 6/8 \\ 7/8 \\ 8/8 \end{bmatrix}, \quad [\bar{\theta}] = \frac{\lambda^3}{6} \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 6 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 12 & 6 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 18 & 12 & 6 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 24 & 18 & 12 & 6 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 30 & 24 & 18 & 12 & 6 & 1 & 0 & 0 \\ 36 & 30 & 24 & 18 & 12 & 6 & 1 & 0 \\ 42 & 36 & 30 & 24 & 18 & 12 & 6 & 1 \end{bmatrix}$$

さて、塑性理論によれば、各分割点における曲率中には、一般に次のようく表められる。

$$[\bar{\gamma}] = [\bar{M}] + [\bar{\beta}] \quad (13)$$

ただし、 $[\bar{\beta}]$: 塑性曲率ベクトル。

式(13)K, 式(9), 式(12)を代入して、 θ_a について解けば

$$[\theta_a] = -[\bar{X}^*] \bar{M}_{ba} + [\bar{X}^*] \theta_a \bar{H}_0^* + K[\bar{M}] + [\bar{\beta}] \quad (14)$$

ただし、 $[\bar{\beta}] = I + w(a)\bar{H}_0^*$, $[\bar{X}^*] = [\bar{\beta}]^{-1}[\bar{X}]$, $[\bar{M}] = [\bar{\beta}]^{-1}[\bar{M}]$, $[\bar{\beta}] = [\bar{\beta}]^{-1}[\bar{\beta}]$,

I : 単位行列。

式(11)K, 式(14)を代入して、 \bar{M}_{ba} Kについて解けば

$$\bar{M}_{ba} = \frac{1}{[b][\bar{X}^*]} \{ [b][\bar{X}^*] \theta_a \bar{H}_0^* + K[b][\bar{M}] + [b][\bar{\beta}] \} \quad (15)$$

同様に、式(10)K, 式(14)と式(15)を代入し、 θ_b について解けば、以下の通りである。

$$\theta_b = Kw \cdot \left\{ [a] - \frac{[a][\bar{X}^*]}{[b][\bar{X}^*]} [b] \right\} [\bar{M}^*] + w \left\{ [a] - \frac{[a][\bar{X}^*]}{[b][\bar{X}^*]} [b] \right\} [\bar{\beta}]$$

$$\therefore \theta_b = Kw[A][M] + w[A][\beta] \quad (16)$$

式(16)を変形して、未知数Kと変形量θとの関係式を求めれば、結局次式を得る。

$$K = \frac{\theta_a - w[A][\beta]}{w H_0^*[A][M]} \quad (17)$$

ただし、 $(A) = [a] - \frac{[a][\bar{X}^*]}{[b][\bar{X}^*]} [b]$, $[\bar{M}] = [\bar{M}^*]/H_0^*$ 。

よって、弾塑性変形量として θ_a を、それに対応するK値を式(17)へよし計算し、K値の極大値を求めるべし。それが、不安定限界荷重のゆゑの終局耐力を与えることになる。さて、問題の残留応力は、式(13)の初期条件として簡単K導入することができるゆえ、任意の残留応力分布に対し、その耐力低減効果を同一演算式によつて数量的に決定することが可能となる。ほか、理解を容易にするため本法の応用例としては、1次不静定ばかりを対象に選び、手変形量に回転角を採用したが、他構造に対しても、同様な手法で安定解析を試みることができる。その際の手変形量は、構造形式によって変化もしくは、回転角のいづれかを選択すればよい。

Ⅲ 参考文献

- (1) T.Ohta and T.Kamazaki; "Elasto-Plastic Analysis of Steel Structures Considering the Effect Residual Stress and Finite Deformation", Proc. of JSCE, No.19-9, Oct. 1971
- (2) 太田, 菊池; 「軸から曲げモーメントを受ける直線部材の安定に関する考察」土木学会論文集第28号2月